

## 2012年の初めに

12.01.25 守山裕次郎

激動の1年が過ぎた。昨年3月11日午後3時過ぎ、仙台市南の「名取川」付近にあるビニールハウスが次々と大津波に飲み込まれていく状況を、NHKのヘリコプターからのライブ中継で見た時、それが現実に行き起きている光景とはとても信じられず、一瞬夢を見ているのでは？と我が目を疑った。しかしながらそれは現実の出来事で、死者・行方不明者合わせて約2万人という戦後最大の大災害となってしまった。

加えて福島原発では、「想定外の津波」で電源を失い、炉心溶融に伴う水素爆発により飛散した放射性物質による汚染が生じ、福島県民にとっては風評被害も含め「喉に刺さったトゲ」として、数十年単位にわたり様々な形での悪影響が心配される場所である。

近年のわが国はバブル崩壊後、莫大な借金が積み重ねられ、この先も急激な少子高齢化に伴う更なる財政悪化が心配され、その将来に大きな不安要素ばかりが目立っているが、それに加えての今回の大災害である。神か仏か判らないが、天は何ゆえにこの国に更なる厳しい試練を与えたのだろうか？

石原都知事が東日本大震災直後に語った言葉で、後に適切でなかったとして撤回したが、この震災は日本人に対する「天罰だ」という発言があった。勿論彼は、三陸沿岸の人々や、なかんずく福島県の人々に対して「天罰」が下ったということを言った訳ではなく、戦後、今日に至るまでの日本人の生き方、特に最近益々顕著になった感のある「我欲」ばかりに固執する日本人の風潮に対し、「天罰」が下ったという趣旨だったようである。

確かに石原知事の見解のように、日本人の精神性が年々劣化していると感じている人は、私も含めてかなりの数になるのではなかろうか。その顕著な事例として「政治家の劣化」が挙げられるが、そんな彼らを選んでいるのが我々国民であることを考えれば、それは正に「天に唾する」ものであり、まずは我々個人がそのことを真摯に反省することが、この国の再生にとって必要不可欠の条件と考えるべきなのであろう。

今回の震災に伴う諸々の出来事やその対処の仕方を見ると、この国の政治家や官僚たちがいかに安易に物事を考えていたかが良く判る。例えば、「想定外の津波」だったと国や東電サイドは言うが、過去の津波の調査から「想定外の甘さ」が有識者によって指摘されていたにもかかわらず、それを国も東電も無視した結果の今回の原発事故である。政治家を筆頭に「万死に値する」とはこの事だが、結局、誰もその責任は取らないのであろう。

加えてこの度の津波による被害や原発事故で判明した事実は、いざという国家の危機に当たり、その対処能力が政府に全く欠落しているという現実である。今回はたまたま自然災害であったが、これが例えば北朝鮮などの諸外国からの突然の攻撃だった場合、それに対応できるのはとても思えず、自然災害をはるかに越える厳しい事態が想定されるのだが、その時もまた「想定外」だったとして言い訳をするつもりなのであろうか。

2年半前、それまでの腐りきった自民党政権に辟易し、民主党の「新鮮なマニフェスト」

に魅力を感じ、多くの国民が支持をした。ところが「一度政権交代を！」とのキャッチフレーズを信じ、政権を任せてみたらこの体たらくである。国家観など全く持ち合わせておらず、一度だけでも政権の座に就きたいという未熟者集団と言えればそれまでだが、まさかここまで酷いとは予測もできず、それこそ国民にとっては「想定外」の現政権である。

正月の新聞によると、直近のアンケートでは鳩・菅が歴代首相のワースト1、2の評価だそうである。一方、刑事被告人・小沢氏の先般の法廷での意見陳述を聞くと、これまたそれを信じる人間など皆無に近いと思われるお粗末な内容であった。いずれにしろ、こんな連中がこの国のリーダー（だった）かと思うと情けない限りだが、さりとて自民党に再び任せてみたいとは、とても思えないところにこの国の最大の悲劇がある。

終戦後、何もない焼け野原の中から「坂の上の雲」を目指し、皆で真面目に頑張った頃は、貧しいながらも精神は健全だった。ところが経済が成長し物質的に豊かになるにつれ、「足るを知る」ことを忘れ去り、「我欲」に満ちた連中が急激に増加した。最近では政治家の墮落だけでなく、厳しい規律が求められる警察官や教職員の不祥事も日常茶飯事化してしまい、何より驚くべきは、最後の砦と思われた検察までもが自分の都合に合わせ、証拠資料の改竄を行なうという「モラル破壊の国」に成り下がってしまったことである。

更に、国家財政的にはすでに千兆円の債務があるのに、いまだに毎年の予算の半分以上が借金という「放蕩経済」を続けている。急激な高齢化の中で、社会福祉予算は今後益々増大せざるを得ず、誰もが消費税の増税はいずれ不可避だと思っているのだが、まずやるべきは、この劣化した国会議員の定数半減と共に、民間に比べ、はるかに優遇されている公務員給与の2割削減が第一優先である。それをうやむやにしたままで、消費税率アップという「バカの一つ覚え」の財務省論理に洗脳されている野田総理は、何故この国民感覚が理解できないのであろうか？永田町の連中には、率先垂範して身を削りながら、右から左までの守旧派勢力と戦っている大阪の橋下市長の「爪の垢」でも煎じて飲ませたい。

振り返ってみて、今日のわが国の状況に関し、我々団塊の世代以上の責任は極めて重い。この莫大な借金は、すべて次世代の人々が背負う訳であるが、この際我々高齢者としては、次世代の人々へ引き継ぐこの負の遺産の重い責任を自覚し、弱者という立場で甘えることなく、応分の負担をするという強い覚悟が必要ではなからうか。

戦後すでに66年、この国は自らを改革することが極めて苦手である。幕末に黒船に驚かされて仕方なく開国し、太平洋戦争に負けた結果として、米国により作られた憲法であるにもかかわらず、その後の時代に即したものに改定することもなく、いまだにそれを後生大事にあがめ祭っているという自主性のなさである。少子高齢化問題なども、何十年前からこうなる事が判っていながら、すべてを先送りしてきた結果の今日の事態である。

この度の東日本大震災は、戦後の「イージーゴーイング的日本人の生き方」に対し、天からの「大喝」が入ったものと謙虚に受け止め、ここで一度原点に立ち返って、次世代の人々が「日本人に生まれて良かった！」と思える国に再生させるため、微力ながら自分として何ができるかを、真剣に考え直す年にしたいものである。

閑話休題。

昨年秋、若きブータン国王ご夫妻が訪日された。親日的で大変魅力ある国王ご夫妻は、東日本大震災の被災地を含めて各地を訪問されたが、行く先々でのその一挙手一投足に、多くの人々が親しみと癒しを感じたようである。ブータンはヒマラヤの一角にあり、経済的には必ずしも豊かでない小国であるが、国民が感じる幸せ度は世界一の国だそうである。

一方、現在のわが国は、物質的には何不自由のない豊かさを享受しているが、ここ10年以上自殺者が3万人を越える事態となっている。その原因は様々あろうが、かつての家族中心の価値観から、戦後教育の影響もあり個人主義に変わったことも大きな要素になっているものと思われる。昨年大震災で改めて認識されたことは、所謂人間は若い頃はともかくとして、一人で生きていくことは辛く、家族や地域社会を含めた多くの人との「絆」の大切さではなからうか。これを機会に、我々も「真の幸せとは何なのか？」について今一度自分自身に問いかけ、これからの生き方を考え直すきっかけにしたいものである。

以上